**世阿弥研究会18年5月22日(火)　振り返りと考察**

目次

一、河村博重先生のお話 1～4頁

1) 青木能舞台でのworkshopに関して

2) 平安神宮での『京都薪能』に関して

3) 金剛流に関する話題

4) 片山家にお稽古に来られる方に関して

5)「雪」号に関して

二、「浅深之事」(浅深のこと)「213頁初め～214頁1行目」 4～17頁

三、感想および考察と次回の予定 18頁

参考文献・資料一覧 19～22頁

**一、河村博重先生のお話**

**1) 青木能舞台でのworkshopに関して**

今、青木能舞台でworkshopがあって、喋ってきたのです。

ご苦労様です。

今日は朝もworkshopがあったので、今月は「面白能楽」のあれがあって16回出演をしています。

16回。今月。

それで「面白能楽」自体は色んなところで77回あるんです。

今月が一番多いのです。

修学旅行の方が多いのですか。

はい、修学旅行の人が殆どです。ああ、そうですか。

またもうちょっとしたら、うちの大学に先生に来てもらいたい。はい。

ちょっと遠いんですよね、山梨まではね。ありがとうございます。

ここも17時から18時までやっていたのです、能舞台を。

やっぱり修学旅行生の舞台だったんですね。

**2) 平安神宮での『京都薪能』に関して**

これこの前にお渡ししましたですね、『薪能』。

そっちは見てない。これがね、6月1日、2日と平安神宮であります、『薪能』。

行かれるのでしたら、前売り券を私が持っています。

私は授業があって全然駄目です。

1日は鎌田先生の「縄文とCeltとかなんとか」というのがあってだめ。

京都の平安神宮に能舞台を作って、『京都薪能』があります。

今年は、義経がthemeなので、牛若丸が出る曲を全部選びましたということなんです。

それで、6月1日、2日が平安神宮で前売り券が4,000円。

私、前売り券を持っています。雨の時にはロームシアター京都、元京都会館であります。

私、全部最近は土日とか、会議とかそんなのばっかりで、行けないです。

牛若丸役っているのかな。それはね、子役です。子方。

えー、可愛いだろうなー。

今回は子方が金剛流の『橋弁慶(はしべんけい)』というのをされて、観世流能「烏帽子折(えぼしおり)」というのが橋本さんの子方です。

観世流能「船弁慶(ふなべんけい)」は浦部さんの子方、観世流能「鞍馬天狗(くらまてんぐ)」は普通は子役が4～5人なんですけれども、特別versionで15人くらいで出るのです。10数人くらいで、『鞍馬天狗』に。その内の1人が牛若丸なんです。すごいな。

観世流能「正尊(しょうぞん)」も子方がやって、「正尊」では切組のチャンバラが観られます。

**3) 金剛流に関する話題**

金剛流っていうのは、どういう流派なんですか、簡単にいうと。

金剛流も大和猿楽の内の1つなんですね、大和の。うんうん。

それで喜多流だけが江戸時代に出来た金春流のお弟子さんでしたのですけれども独立をして、1座というか流儀になったのです。金剛流には「上掛」と「下掛」とがあって、京都にやってきた観世と宝生流が「上掛」になった。それで奈良に残っていたのが「下掛」で金春流と金剛流だったのです。

金剛は本家の金剛は途絶えたので野村金剛というのが残っていて、そこが今の京都の金剛流のお家元なんです。

それで、「舞金剛」といって割と型が派手なんです、金剛流の特徴は。ふーん。

それで宝生流は割と地味なんですけれどね。

金剛も金春もまぁ、その何か能のrootsの世阿弥研究会でやっている秦氏から来ているというのがあるので、たぶん渡来人ではないのかという説があるのです。ふーん。「金剛(こんごう)」とか「金春(こんぱる)」とかいう呼び名がね。

「金」が付いているから。そうですね。

金剛というのは「diamond」みたいに固いのですね、金剛というものは。

それで金剛流は、昔は四条烏丸をちょっと上がったところの、室町通りだったかなにあったのですけれども、移転して、今は烏丸通りの中立売くらいにあります。

それで今の金剛流の家元が非常に池とか鯉が好きなので、前の能舞台でも池とか鯉がありました。

ふーん。

金剛流のたぶんInternetで見ていた時に、たぶん『三人翁』が出ていたと思うんです。そうですね。

『三人翁』には色々とあって、1つは、「舟ノ立合」とか「弓矢立合」になって、色んな流儀が集まって3人でやるというのもあるのです。ふーん。

それで多くは今のような能装束ではなくって、白地の装束が結構多いのですね。昔は、そうやったのです。

それで今みたいに、能装束をちゃんと着るようになったのはたぶん、江戸くらいからかそれともその前の秀吉とか信長が自分も舞うから贅沢なものを着てやっていて。それまではちょっと着るものは質素やったらしいのです。

そしてtempoもたとえば今、1時間や1時間30分の曲が昔は45分くらいで半分くらいのspeedだったらしいのです。それで江戸時代にそれが「式楽」となってもったいがついてもっとゆっくりになったと。ふーん。それで江戸の時に、国家公務員になった訳です、能楽師が。

だから「禄(ろく)」という給料をもらっていたらしいのです。

それで家元は大名classの「禄(ろく)」をもらっていたらしいのです。

その「座付」というのがあって、笛とか鼓とか大鼓とかは観世の流儀の太鼓はこうだと、これは観世流とかそういう風に。

つまり阪神のcatcherとかpitcherとかsecondとかそういう風にして決まっていた訳です。

それがだんだん江戸から明治期にかけて消滅をした流儀があるのです。

あの、お囃子とか、狂言とか。

それで、狂言は「大蔵流」と「和泉流」の二流になった訳です。

昔は、4流(4座)があったのですね。野村萬斎さんがそうなんですね。

和泉流の中に野村萬斎さんがいはるのです。

そして京都中心で、江戸に行ったので、その江戸、東京の今の亡くなった幽雪先生のお父さんのお兄さんかな、お兄さんが家元にならはって、片山家と家元が親戚関係で繋がっているんです。

それで京都やったら、天皇が観る能とかやったら片山家がそれを受け持っている。

だから関西では一番中心の家柄で特別な扱いをされているのが片山家と梅若家なんです。

梅若家は、観世流のツレの家やったのです、昔は。

それで梅若何某というのは割と、今は六郎玄祥先生なんですけれども、今年の3月やったかに、二代目の「実(みのる)」という家の名を継がれたのです。

それで今の六郎先生は10年毎ぐらいしたらコロコロ、コロコロと襲名をして名前を変えておられるのです。それと色んな「新作能」と「復曲能」を精力的に舞っていらっしゃるのです。

4) 片山家にお稽古に来られる方に関して

先生、片山さんの所にお稽古に行かれる方というのは、京都だとお寺の方とかが行かれるのですか。

さあ、ちょっと分かりませんけれど。

私、知り合いがお寺のお嬢さんで、まぁ、お嬢さんと言っても私よりずいぶん年上なんですけれど、能楽は片山九郎右衛門さんに、片山幽雪さんから習っていて。はい、そうです。

だから、みなさん、そうやって、お寺の方は片山九郎右衛門さんから習うんだなぁと。

お寺には限っていないと思いますけれどね。

5)「雪」号に関して

「幽」雪というのも、何か家元が重大な働きをした人に対して送るのが「雪」号という「雪」なんです。

昔は、杉浦先生の今は杉浦豊彦さんなんですけれど、そのお父さんの杉浦元三郎さんこれは片山家の三男なんですけれど、その他にも「雪」号を持った方が何人かいらっしゃるのです。

**二、「浅深之事」(浅深のこと)** **「213頁初め～214頁1行目」**

ここのところは「浅深」ということになっていますが、能の大小、精粗、大振り小振り、それから詳しくか荒い、この辺りのことが演出家の面から、能を育成する人の面から、教育者の面から、また能役者の面からと、少なくとも3面から指摘されていると思うんですね。

それで、1つには、細かすぎてはいけない。

まぁ、人間もそうですけれど、細かすぎては駄目なんですよ、何事も。

木を見て森を見ずになりがちなんですね。やっぱり。

森全体を「バシッ」と把握することが大事だ。つまり、全体を見るとか、全容を「ばしっ」と掴むということが肝心ということですね。

その全容を「ばしっ」と掴んでいると、細かいところはいかようにも工夫は出来る。

だけど、木ばっかりにこだわってしまうと、森全体みたいなところに行き着けない。

だからどちらが優先順位が、教育の面から見ても就業の面から見てもどこに優先順位があるかというと、まず全体的なものを「バチッ」と基本になるもの骨格になるものを掴み、育成して、それから細かいところをきちんとできるようにしていく。

私がここを読む度に思い出すのは河合隼雄さんです。

河合隼雄さんは臨床心理の大家になっていくんですけれど、臨床心理の大家になっていく前に、彼は、数学者であったんですね。京都大学の理学部数学科に入ったんですよ。

それでその数学に入ってこう何を勉強したのかというと、まぁ、もちろん細かい数学も学んでいく訳ですけれど、様々な分野の数学を学んでいくんですけれども、数学が一種の哲学にも似て数を使って非常に壮大な世界を捉えていくというような作業をしていく訳ですよね。非常に、ある面では哲学的、論理学、記号学、哲学、この辺りが絡まるところが数学。

その数学をやっていたためか臨床心理という細かい、本当に細かい心の襞(ひだ)に分け入っていくんですけれどあの人は大局が見えている人ですよね。いつも僕は感心するんですよね。

臨床心理から入った人は、やっぱりその心理の襞(ひだ)みたいな、細やかなところにどうしても注意が惹かれたり関心があったりするんですけれど、河合さんはその辺りが凄くて。

あの人はちょっとぼんやりとしているではないですか。

そこが重要で、彼がよく言う名言に、「何もしないことに全力をあげる」という、これは当に能の公案みたいな、世阿弥の言っているようなことに近いものなんです。

何もしないんだけれど、全力をあげるんですよね。

表面的には何もしていないように見えるけれど、こころは物凄く速く運動しているというのか。

「ぼーっ」としているように見えて、本当に中身は濃ゆいのですね。

世阿弥はここで、身体は「ぼーっ」としているようで、こころを細やかに働かせろという、この身体を「ぼーっ」とさせているというのは剣道でもそうですけれど、小技に走る人は小技しかできないのですよ。だけど全体をrelaxさせて、「ぼーっ」とふわっとした感じで立っていると、瞬時に「バーン」と大きな技を出すことができますよね。

だからあのその辺の全体を見て、細かいことにこだわらないけれど、瞬時には細かいところにさっと行き着くことができる。

この辺が、非常に重要だということを言っていますね、いくつかの観点から。

それで、あの、教育の面から見ると、大学院生にも私は思うのですが、最初から細かいことをやらせてはいけないと思う。大学院教育なんかはと思っているんですけれど、今の大学院教育は最初から細かいことをやらせすぎていると僕は思っているんですけれどね。

それは博士論文というgoalを設けているためにそうなってしまって、結局、その人の持っている思考の幅とか、感覚の幅とか、想像力とかいったものを「ばっ」と広げていくような教育ではなくて。

あの博士論文を書くためにdefenseをどうしていくか、どこからいってもつつかれないような論文にするにはどうするのかみたいな、これって本末転倒、学問の本末転倒じゃないのかと僕は思うんですよね。私たちは博士論文を書くために学問をしているのではなくて、学問が面白いから学問をしているんですよ。

学問が面白いという、学問の問いかけは非常に深くて広いもので、様々なapproachもある。そういう風なことを、全容ですよね、大きいものを手探りしながら探っていって、小さい具体的なものに焦点を当てていくというのはとてもprocessとして納得できるんですけれど。最初からこれを作るために細かいことを緻密に、緻密に、緻密にやっていくのは、私は人間を育てないと思う。今の博士課程のやり方では、研究者の実力を育てられないんじゃないかと思うんですよ。まぁ、みなさんも大学教育とか大学院教育に関わっているので、その辺を話してもらいたいし、それからあの、河村さんは能役者の教育に携わっているから、弟子たちを育成していく時に、どの辺から優先順位を立ててやっていくのかということを。

私は、細かい教育は嫌いなので。

それで、こうしちゃいけない、ああしちゃいけないということは極力、子どもの頃はそうですが良くないと思っていて、好きにやらせながらそのものが持っている特性みたいなものを最大限に伸ばせて、大きい体格みたいに伸びているところに緻密なものをどんどん、どんどん加えていくみたいにものの順序はそういう風なのが良いのではないかと私は思うんですね。

河村さんから聞いて、みなさんも。

はい、僕はね、そのこともあるし能の型の事もこれを読みながら感じたのですけれども、「居グセ」と

いうものがあるのです。座っているだけなんですけれども。

その中で『井筒』という曲は、何と言うたらいいか、待つ女で結婚をしているんですけれども主人を待ったり、それでユーミンがいかにも作りそうな恋の永遠性がある、同じ待ったのに「居グセ」で『野宮』というのは追いかける女、気の強い女ですね。座っているだけなんですけれど、その心が違うと。そこら辺をこの文章を読みながら感じたんです。今度『野宮』をするのですけれども、『野宮』はとにかく、光源氏を愛しているその愛というのは同じだけれども、その愛が深すぎて、葵上を憑り殺してしまったり、浮舟かな何人かそういうことをしてしまう。結果はその光源氏の六条御息所の娘が西国に行くことになって、伊勢の神様の格好になって、その練習のために『野宮』に行く時に付いて行くと。それが7月7日に光源氏が榊の枝を持って行って最後の出会いになるというところを座っているだけで地謡の力で演じるということになる訳です。へー。ははは。

大変なんです。だから、同じ座っていても、表面的に出ているのは、能の座っているだけだけれどもtypeがあるし、シテ方の座っている心持ちが、揺れ動いているのがだいぶ違うということになります。

それが萬斎さんの話しで言えば「stayした時に立ち上がって動き始める、たまっててですね。」ということを言われていますね。

あの、河村さんはどっちかっていうと、動きのある方が得意ですよね。そうですね、好きですね。だから動きのある方が得意な人が、殆ど動きのないそういう作品を演じるというのは、当に修行そのものですけれど。そうですね。

そこを上手くやり通せたら、河村さんの芸幅が、相当深まったり広がったりするということにならないですか。

それはやっぱりシテ方の力もあるけれども、そこそこの人やったら周りの地謡の良さとかお囃子の良さとかで雲泥の差になるんです。

そういう面も無きにしも非ずではあっても、僕はあのやはり、観世寿夫さんのね、『井筒』も、現実には観ていないけれども、映像でしか見ていないけれど、あれを見るとやっぱり周りがいかんせんあの人が凄いんですよね。だからその何もしていないようなのに「居グセ」の後ろ姿だけで語っているというか、その悲しみとか哀愁とかいう風なものを出すというのは、これはその後ろ姿の表情というものがあの前面の表情以上に、たとえば前面で見たら面を付けてとかある訳ですが。「面を掛けて」ですね。

「面を掛ける」し、割と手とかそういう風なもので、扇とかで表現をしていくことができる。

だけど、背中を向けると殆ど観客に何か表情のようなものは表現しない訳ですよね。

表現しないで表現するという世界を成功させなければいけない。

隆司おじさんが「背中で見ろ。」ということを言っていましたね。

誰が。河村隆司が。

それは『五輪の書』に書いてあるという風に。

「背中で見る」っていうのは、文章で書いていないと思うけれど。

「後ろの方に意識を持って行って」。

それは世阿弥が書いていることで『五輪の書』にはそういうことは、僕も読んでいるけれど無かったと思う。「全体を見る」っていうことは言っていますよ。「背中で見る」っていう直接的なことはなかったと思いますね。でもそこのところは、すごく難しい。一種の能の極意はその辺にありますよね。

動かずして一つの動きを、あるいは表情がないところに表情をどうやって身に付けるのか、逆説的ですけれどもね。

でもまぁそれはそれとして、今のは究極の話しなんですけれども、教育とか修行の面で、どういう風に学んでいくべきか、或いは、学習をしていくべきか、今まで教師として関わってきたことと、今やっていることとの関係を考えながら今の問題を考えるとどうなるでしょうか。

私自身はね、修士論文こそ細かいことではなくて、大きいことをやらせるべきだと思っているんですよ。学部の論文でもね。だんだんと細かくなっていって博士論文が最も小さいというね、まぁ緻密という。でも学部論文・修士論文は、大きい構想を展開できないやつがどうして博士論文をちゃんと書けるかと思うんです。今はどこでも大学院全体が細かいですからね。

余りにも形にこだわるということが多いんじゃないのかなというのが自分の感想なんですけれど、思い切って想像力を展開させつつそれを形としてまとめ上げるというのが自分の中での究極の形かなと思ってきたのですけれども、想像力は要らないという雰囲気は多くのところではありますね。

そうしますと学問というのは、ある作業を通して、形を整えておくということだけじゃないのかなという退屈な思いはしたことがありました。

この前の言い方をすると「規定演技」と「自由演技」の問題になりますね。

想像力を広げるということは、ある種の「自由演技」を展開するということなんですが、大学院の修士論文を書く時とか博士論文を書く時とか、まぁ博士論文を書く時が一番そうですが、確実にどこからいっても問題のないような「規定」を、つつかれない論理構築や、論証というものをしなければならないということですね。

話しは変わりますけれどね、この前、岡潔の番組をテレビで見たんですね。

見ました、年末の。見てない。

それで岡潔は佐々木蔵之介が演じてね、その妻を天海祐希が演じて、それが非常に面白かった。僕は、岡潔に関心がありますから。そのテレビも面白かったんですがね、どういう所が面白かったかというと、岡潔の先生は岡潔を理解できなかったし、指導できなかったんですよ。だから本当に岡潔を理解したのは奥さんだったんですよ。

それで結婚をした相手は岡潔を信じて岡潔がすごい数学者で数学理論に取り組んでいることが感じられたんですね。

それはそのテレビでは最初に出会った時に、雷がね、上から下に落ちるんじゃなくて下から上に上がったんですよ。

そんなことはない。現実に有り得ない。雷は上から下に落ちるんだからというようなことを常識的には言うんですが、実際に雷は下から上に上がった。それを見た、2人が。

それで「見たね」、「見たね」。まだ奥さんになる前の初めての出会いの時だったんですけれど。その時に、後に奥さんになる女性が、そんなのは現実だから認めたら良いのですよ。

だから常識を外して、下から上に上がるという風に仮定すれば良いよと。

現実を認めて、そういうこともあるという風に、仮に考えれば良いことであって、こうでなきゃいけないっていうようなことは考えなくて良いということを言ったので、岡潔は「ああ、そうか。」「そういう風に仮定して見るということも成り立つわな。」ということでideaを持って、そして岡潔は独自のですね、数学理論を構築していくんですが、それをどうしても京大の教授はですね、理解できないんですよ。

そうか。

それでお前の言っていることは、学会発表をしてもね、成り立っていないという訳ですよ。

分からない、成り立っていない、と。

ところが、あの、これがあるんです、こういう世界があるんですということをずっと言うんです。

そしてFranceに追いやられるんですよ。

Franceに追いやられて、Franceで学ぶんですけれど、Paris大学でね。

そのParis大学の先生は、なんとなしに分かる訳ですよ。

まだ数学理論は編み出されていないから、こういう数学の世界があるっていうことだけは感じられるんです。それで日本に帰ってきて、やっぱりこいつは欲しいということになって、広島大学に追いやられるんですよ。

京大に置いてもらえないで、広島大学に居られなくなって、彼は奈良の田舎に引っ込んで、それで百姓みたいにしながらずっと考えているんですよ。

そこへFranceからですね、論文を完成させて投稿するんですね。

France語かどうかは知らないのですが。

そしたらあの、暫らくしてですね、その映画ではですね、彼が書いた論文をですね、湯川秀樹氏の壮行会の時に奥さんがですね、「これを読んでください。」と言いに行くんですよ。

うん。あの夫の論文を。「夫は論文を完成させました。」と。

先生は相手にしないのです。京大教授は。

でも奥さんの訴えが凄い切々としたものだったので、周りの人が、じゃあこの会は、湯川秀樹君の壮行会なので、湯川秀樹君にAmericaにこの論文を持って行ってもらおうということになって、Americaにその論文を持って行った。それがFranceか何かに行って、Franceの昔一緒に同僚で学んだ先生が、これは凄いということになって、慌てて日本に来て、奈良の山奥に行って、吉野の山奥に行って、岡潔、岡潔先生やったね、みたいになって、岡潔の数学理論を初めてFranceの数学者が認めたみたいになって、それ以降、岡潔は凄いということになって、やがて日本では文化勲章をもらってということになるんですね。

この岡潔のことなんかは「天才」という一言では片付けられない、やっぱり学問というものの醍醐味をそれは示していると思うんですね。

私は学問というのは、そういうものだと思っているんですよ。

誰もが分かっていることを分かっているように書くのが学問じゃない。

分かってないことを「ふわっ」と照明を当てて論証をするのが学問だと思っているので、理解者がいなくても良いと思っているんですよ、最初は。100年後に理解者が出て来ても良いくらいに。今、博士論文でdefenseをしても、これはある意味で分かり切っていることじゃあないの、と。分からないことを探求するのが学問なんだから。

そういう部分を学問は持っていないとやっぱり、尻すぼみになるんじゃないのかな、今後ね。

今の大学教育なんか、それは凄く危惧しております。

木村先生はどうですか。

まったく鎌田先生に同感で、大学教育に30年私も関わっている訳ですけれども、ここあの外国人の方もいらっしゃいますけれど、日本人の学生の勉強の仕方じゃ駄目だなと思いました。昨年、3人doctorの学生を持ったんですね。

論文ではないんですけれども、理工学博士課程で博士論文を3人共に書いていて、物凄く勉強をするんですよ。

中国が2人とあとThailand人なんですけれど、ずっと柔軟なんですね。

それで、神話の話しをやっているんですけれども、毎回のpresentationが素晴らしくて、彼らは博士論文をもう一つ書いても良いと言うんですね。うん。

物凄い勢いでやっていて、サイド論文を書くって言ったくらいなんですけれども、ただ、とにかく理系で帰りたい訳ですね。

向こうに帰るとやっぱり理系の方が強い、博士号を取った場合。

だから神話とかdanceも芸能にしても、日本の学生よりよっぽど興味を持ってくれます。

専門書を読みたがる。

そういう自分の専門外の授業にここまで入れ込めるのはなんでなのかなと私なんか不思議になるくらいで、もう見事な。それは学問だからでしょうね。

そういうところの凄く知識欲も多かったし、そして自分の国と日本の事だけではなくて、必ず世界のことまで考えるんですよね。

うちの学生では、他にも何人かそれなりに大らかなのがいるけれども、ここまでやらないなっていうところまでreportでやってきて、100点取りたいとかそういうのじゃないと思うんですね。本当に勉強がしたいからやってきたんだなということは、あの良く分かる。

だけど、とにかくtitleが欲しいのはあからさまでした。

「博士号」が欲しいとはっきり言うので。それはそうでしょう。

それは、あの何と言ったら良いのか、自分の生き方のために、もう現実でした。

それで、とにかく中国に帰らなきゃいけないというのが強かったので。

あと80点以下は絶対に取りたくないとはっきり最初から言っているし。

その辺は必死さが全然違うなと思いました。

海外と日本の事情、日本も随分、変わったのかもしれないし、今の鎌田先生のお話しだったら、大学院教育というより日本の学問体制というところでは、先生からお話しがあった熊楠とちょっと似ているなと思って、鎌田先生は講義の時に熊楠にもし論文指導があったら、80枚の履歴書なんか書かないで論文の書き方を学んで縛ったら違う全集が出来たりだとか、editorがいれば全然違う熊楠像が、変わり者とか変人じゃなくって、天才の生物学者ですか、という風になったかもしれないってお話しをされていたのを聞いて。だから可能性はあっても、活かせない、この状況をというのが。

だいたい海外で認めてもらってから逆輸入で日本にというものと、後は上下関係みたいなもので先生の言うことってやっぱり聞かないといけないみたいな。

この間の井上ウィマラ先生の、大川小学校の子に呼ばれたという文章の中に、先生は凄く絶賛をなさっていたんですけれども「先生の言うことを聞かなくても良い時がある」と井上先生は書いておられたのですね。あれは井上先生なら書けるな、と思いましたね。

そういう何か日本の中にある上下関係や権威や、それに逆らったらもう駄目みたいな、どこか脅迫的なところがあるのは事実で、知らない内に自分もそうしているんだったら良くないなと思うんですけれども、ただそれにしても、日本にもそういう世界levelの人がいる可能性はあるんだと思うんです。

もう一つは凄く身近な例で、鎌田先生はどう思われるか分からないんですが、私は『聖トポロジー』が私、大好きなんですね。ああ。

あれは先生が30代じゃなかったですかね。1990年に出したから。

本は89年。39か。だから、あの構想というのは30代に持っていて、博士論文はもっと後に書くんですけれども。そうですね。

私は、この間、立教大学であった、Franceの哲学のBernard Andrieuさんとお弟子さんか何かもう1人のAlexandre Legendreさんの研究発表を聞いて、Bernardさんは英語が余りお得意でないので良く分からなかったのですけれども、図表ばっかりで。

もう1人の人は、色々と説明をしているけれど、鎌田先生は『聖トポロジー』でその辺を全部書いているんですね。「身体の進化と自然化」ですか。鎌田先生は30代に直感的に結論から全部、持っていたのかなとか思っていたのです、その時に。うん。

回りくどい博士論文を書くという手続きをしなくても、何か凄くstraightにそれを書いていらしたので、あれをもしこの間に研究発表をした人が聞いたら、驚くんじゃないのかな、とか。30代のその頭の柔らかさとか。

ただ、そこをどう日本の状況や世界の状況に活かせるんだろうっていうところで鎌田先生がさっき言った大きい構想とか、自分のideaみたいなものを発表してじゃあ、それが何か凄く、その人にとって利益になるかというと日本の社会では余り利益にならないのかな。

どうなんでしょうか。はい。

やっぱり権威の中で認められるしかないような感じなんですけれど。

その辺りが、大きな問題だね。はい。

学問というよりも制度上の問題。そうですね。

学問そのものは自由なので。

あのその芸術も自由ですけれど、でも、日本の芸術が本当に自由かどうかというのは例えば陶芸の世界を見ても「ちまちま、ちまちま」とやっているとかあるじゃないですか。

うん。

それから「画壇」みたいな、「画壇」も、ちょっと違うけれども、そういう「何とか会」のような結社みたいなものに入っていないと、認められないとかね、そういう側面もあるので、まぁ色々と制度上では問題があると思うんですね。

近藤さんは、今あの大学院教育というよりも聴講生とかで自由に、まぁ研究生とかに近い立場だと思うんですが。そうですね。大学院教育と関わって、自分なりに自由な学びをしてきていると思うんですが、今の問題どう思いますか。

はい。ええと、この学問と制度の関係ということですよね。大きくね。はい。

今の大学院教育の中でも、私たちがいたのは社会人の方が中心にですね入っている社会人大学院というコースということになっていたんですけれども、そういうところだと社会の事もある一定限理解をした上で学び直しとして再び大学院に入るとかですね、それで必要なところを自分なりに探求していくということになりまして、それは学生の方がですね最初から学んでいくのとはまた違う形での学びというのができるようになっているんだろうなと自分でも実感を持っているところですし、そういうところなんかがあったりしてですね。そうするとだから学びというものが単に1回きりのものということではなくして、まぁ「生涯学習」という文脈の中でですね、そこの中にあって、1回1回の授業はその場限りかもしれないけれども自分の中で何度も何度もそれを考えたりすることによって少しずつ、何か違った形でのですね、光の当て方というのがあったりということに気が付いて行くということで、そういう意味での学びというのがある。

そういうところがあるのではないのかなと思っていて、要するに、そうして学問の方からだんだんとですね、制度というもののあり方というものを少しずつ変えていくというか、そういう風なことというのはこれからもあり得ていくだろうと思うし、まぁそういう風にしていくべきなんじゃないのかなと思っているところですね。

河村さんは、今のを聞いてどうですか。

僕はね、その話しもそうなんですけれども、ちょっと話しが変わるかもしれないけれど、一般的に常識と思っているものが本当に常識だろうかなという気がするんです。

最近、読んだ本の中で『カラスの死骸はなぜ見あたらないのか』というのがあって、あれだけカラスがいるのに死骸が見当たらないと。見た人はいないと。それで色々考えられて仲間の死骸はカラスに食べられるとか、腐ってしまうとか色々とあるのだけれども、その人の説は「消える」んやて。天然で育ったものは消えると。ものは波動やから土に戻って来る。

ただペットとかは、人間に関わったものはそういうことはないと。

たとえば地下道にいる「クマネズミ」は、ネズミ算式に増えていると。そうしたらそういうところは、詰まるはずだけれども、清掃をしている人は詰まったところを見たことがない。

そして死骸も殆ど見たことがないという面白い話しがあって、能も、『井筒』でも『野宮』でも「かき消すように失せにけり」と言うて、亡霊が出ていたのが「ぱっ」と消えたりするから、そこに繋がっているのかなというのと、後、『神島の百匹目の猿』というのも面白い話しで、若い女の猿が芋を海水で洗って食べるようになったのですわ。

それでそれを見ていた中年以上の猿は真似をしないのですわ。

若い子猿だけが真似をして、それが百匹真似をするようになったら、全く違う場所でも猿が洗い出したのですわ。それは全国に飛んだというそういうあの不思議な感じだなと。

それで、僕の携わっている能の中にも、能楽の中にもそういうものが、亡霊がパッと出てきたりという色々な見えないものを見る世界でもあるのではないのかな、と思っているんです。幕の所を、あの世としてあの世から出てきたり、そのあの世=天上界というのがあって天上界から天女がやってきたり、そして右回り左回りをしながら色々な語りがあって、そしてまた消えて、お坊さんのお経か何かによって、また亡霊が在りし日の姿で出て来て、そして、成仏する人もいるし成仏しない霊もあると。

それはちょうどお医者さんのcounselingみたいなものやと。それで注射か何かをやるけれど直ぐに効く時もあるし、なかなか効かない時もあるとか。

そういうものを考えるとお能というのは何か、ただの劇ではなくて見えないものを見る不思議な精神世界とspiritualに物凄くかぶっている部分があると最近思っているのです。

あの、この前、色々と話しをしたことと繋がってくるんですけれど、この前というのは今読んでいるところの前のところにある一応問題はね「能がどうやったら上手になるか」ということですよね。上達、つまり名人になるということは、能の奥儀みたいなところへどうやったら成長をしていくことができるのか。成就していくことができるのか。

具体的にいうと河村さんがいかにして「観世寿夫」になるか、みたいなね、ことなんですよ。ふふふ。それで「観世寿夫」になれれば良いのですよ。

だから数学者が「岡潔」になれれば良いし、他の「南方熊楠」が好きな人だったら「南方熊楠」になって良い訳なんだけれど、もっと大役者になるとか、その道の達人になることがどうやったら出来るのかという問題だと思うね。

その道の達人になるためには、やっぱりこう条件というのがある。

それは細かいところが出来ないといけないんですよ、間違いなく。

それは学問もそうですね。だから揺るがせにしてはいけないんですね、一字一句。

1ミリでも違っちゃいけない部分は1ミリでも違っちゃいけないんですよ。

それはきっちりとやりながらも、しかし独創的な誰もが今までやっていない誰もが今まで理解できていなかった、誰もが初めてその問題を見て、でも「あ、そうか。」と納得できるようなところを明るみに出していかなきゃいけない訳ですね。

誰もが分かっているようなことを辻褄を合わせてこういう風に縫い繕って、じゃあまぁ無難に出来ました。じゃあまぁこれは無難であるからdefenseとしては成功しているので博士号をあげましょうでは、これは博士論文の審査には合格しても、博士論文が本来持っている新しい問題世界を切り開くみたいな部分は弱い訳ですね。

つまりoriginalityは弱い訳です。

それであの、最大限、学問が学問である由縁は、originalityだと僕は思っているんですね。芸術が芸術である由縁もoriginalityであると思っているんですね。

Originalityというのは、あの、理解できる人は少数だと思っているんですよ。

最初は。

PicassoのCubismでも最初は、「何、これ。」ということだったと思うし、最近、僕Sibeliusをよく聴くんですよね。Sibelius。Sibeliusは良いんですよね、すごい。

私が最近はまっているのはSibeliusの「ロマンティックな情景」というやつで、このSibeliusの出だしが独創的で、今まで聴いたことのないような出だしの独創性があって、ある種の不協和音で「がーっ」と入っていくんですが、「えーっ、今までSibeliusみたいな人の世界を殆ど知らなかったのは、なんでこんなpianoの曲が出来るのか」というまぁ、そのこう、出だしの発想。「19世紀の終わりくらいかな20世紀の初めか19世紀の終わりくらいにこんな独創的なものが生れていたのっ。」と驚いたんですよ。音楽にせよ美術にせよ、芸術の様々な世界にしても、やっぱり独創性というのは新たな世界を見る、感受する。それは学問も同じだと思うんですね。

新しい細胞の世界や再生医学の世界を垣間見せるのもそうだし、他の領域もそうですね。

ノーベル賞級の研究も全部そうだと思うんですね。

それは今までなかったものをこの世にもたらすということですよね。

それが倫理的に良いかどうかとか倫理的にどうかというのは二次的に後の問題として出てきますが、そういう今まで無かったものを明るみに出してくるという仕事はやはり独創的なものになる訳ですね。

世阿弥の言う「めずらしき」ですよね。むしろ「面白き」なんですよ。

だから芸術と学問には「めずらしさ」と「面白さ」は必需品だと思うんですね。

だけど、多くの今の修士論文や博士論文に書かせようとしていることは、面白くもないし珍しくもないようなことを書かせているようにも思える訳ですね。

本当に独創性があるのかどうかといったら、まぁ、ちょこっとはあるでしょうが、本当に独創的なものは通らないみたいなね。むしろ、今の制度では本当に独創的なものは評価されないようなそんな側面があるように思っていますが、だからと言って今の制度に反逆するだけの大学院生も先生もいないので、それはそれとして、制度としての博士論文の指導はやりながら、本物の博士論文というのはこの程度じゃないよということを伝えないといけないと思うんですよ。

じゃあ、本物の博士論文って何と言ったら、生涯かけてその人が独創的なものを切り開いていく、まぁ、「規定演技」を終えて本当に「free演技」をしてその人が全面展開できるような学問の世界という風なものを実現していく道というのがやっぱりこう先生も行けなきゃいけないし、学生も行けなきゃいけないと思うんですよね。

そういう道を目指していく。そうでないと、進化しないと思うんですよね。

まぁ、あの理工学の世界とかは競争ですから、直ぐにその理論なり発見なり発明なりが応用されてお金に結び付くかという実用性に結び付いていく。大きなprojectに結び付いて行ったりするので、まぁ、そういう意味で経済というものと結び付いていますからね、そして経済と結び付けば結び付くほど、世の中の評価というものとも結び付いてくるので、その辺も必要なんですよね。実際には。

工学部と生命環境の先生とたまにお話しをする時にcost performanceのことが出るんですよ。

それでいきなり結構projectが多くて、2,000万とか3,000万とか貰っても使えなくて結構無駄なつまらないものをやっている人がいると。

だけど、やった風な結果を書くんですよ、こういう時そうすると。

Cost performanceで研究費を高くもらった方が、あの、周りからの評価も高いと。

うん。

だけど良い研究をしたかというとこれは、前は「あんなの。」と言っていたり、「要らないものを買っている。」とか言っていて、整合性があるんですよ、やった行為に。

まぁ、それは「規定演技」をやっているようなもので、積み重ねているようなもので。

そうなんですけれど、私は「凄いですね、そちらの学部っていうのは皆さん2,000万単位で研究費を稼ぐんですね。」と言ったら「いやでも貰ったけれど、ちゃんと使っているかどうかというと分からないんですよ。」みたいなことを言われた。

機械を買ったり色んなものが、理工系のものはそうですよ。

だけれども、それがないと回っていかないような仕組みになっていて、1人の教授の研究ではなくなっているから。Teamだから。そうですね。

Project teamを組んでやっていて、その中にどんな新しい発想や芽が出るかという風な部分もあるから。

そういう意味で、面白い人材がそこから出てきたらそれはそれで意味があることですがね。それでもちんまり、ちんまりとしたところだけにある無駄金みたいなものを投資している結果になっているものも相当数あるでしょうね。

ということを科研も分かっているので、私は「新老年学」の新しい「特設分野」というね、今までの領域を取っ払って「老人学」「新しい老人学」の世界を理系から文系、宗教学まで全部含めて、あの、あの「特設分野科研」というのが出来たんですよ。ふーん。

その「新老年学特設分野」の審査員を3年間やったんですよ。

10人くらい、東大の先生とか、京大の先生とか、広島大学の先生とかと。

非常に面白かったですよ。その面白かったのは、そこで評価するのは、過去の整合性、研究の積み重ねではなく、どういう新しい老年のね研究が起こり得るかという未来可能性をどこまでも考えながら提案を申請書を書いてくる訳ですよ。

普通の審査はがっちりと無難なものを科研費採択をするものが多いのですけれど、その無難なものじゃなくて冒険をしているものを選ぶ訳ですよ。ふーん。

その冒険、独創性とか、冒険をしてこういう可能性を持ち得るかもしれないみたいに、だから一種の賭けなんですけれど、そういう側面もやっぱり必要なんですね。

よくなんか研究をしていて、失敗をしてしまった。それで発見があったとかいうのもありますね。

ああ、それもありますね。

「iPS細胞」でもそういうことを言っていたよね、山中先生ですね。

それはあの、大いにあります。

でも、やはりそれも1つの価値で、そこのprojectというのは5,000万きたやつだともうそれだけで良い研究だって。まずはcost performanceで、理系は見るらしいんですね。

あそこは5,000万もらっている。それはね「3K」を崇めるような常識ですよ。うん。

つまり「給料が良い」とか、「背が高い」とか、だからそういうのは世の常識ですよね。

うん、そのlevelなんです。

でも学問というのは常識をひっくり返すのが本来の学問である。

でも、常識に乗っかって科研費とかは支給されるんですよ。うん。

私がやっている「身心変容技法研究会」なんかは、かなり非常識な側面を持っている科研申請だけど、「霊的暴力」とか、今までにない。でもよくあれが通ったな、と思って。

まぁ、でもやっていることは、実に重要なことをやっている訳ですがね、中身は。

どこに出してもはずかしくないようなことはやっているんですけれど、でもそれを選んだ人も、大したものだなぁと思いますよ。科研であれを通してくれた人たちもね、審査員。

でも、その学問が持っている未来を切り開いていくような力というものを、特に人文科学などでそういう風なものの可能性を拾っておかないとどうなるのかな、って思いますね。

私はこの前も言ったように今度、詩集を出すんですけれど、これはやっぱりあの「自由」なんですよね。根本的に。

能も本来はそういう自由さがあって、しかし、貴人が観るので、或いは観る人によってそれを分かりやすくしなきゃいけないという工夫を世阿弥はしていく訳ですけれど、品があってとか、優美であってとか。そして面白さがあってとか、めずらしさがあってとかそういう風なものを作り上げていくんですが、しかし、能にそれだけ引き込む魅力が無ければ何百年もそれは伝わらない訳ですよね。持たない訳ですよね。だから、「古典」と言われる作品は、PlatoのものにせよNietzscheのものにせよ古代・中世・近代を問わず、やっぱりそれだけの魅力を発信しているんですよね。

それはやっぱり誰にも真似できない、独創性があるんですよ。

それでやっぱりPlatoを読んで面白いし、Nietzscheを読んで面白いし、Kantを読んで、Kantを読んで面白いと即言えませんが、Kantを読んで独創的だとやっぱり思いますよね。

やっぱり誰もがそんなにかっちりと考えていないようなことを『純粋理性批判』みたいなものを「どーん」と大上段から論じているようなものは、やっぱり構想力において独創性があるように思うんですよね。そういうものがやっぱり残っていますよね。どう考えても。

だからやっぱり「歴史の篩」には掛けられているんですよ。

だけど我々の周りで、年に何百本も何千本も出ている博士論文がそういう篩の中に一体どれだけ残るだろうか。うーん。

そういう意味での学問の独創性と、進展ね。或いは歴史に耐え得るようなものにどれだけがなり得るかというのは、やっぱり我々が自分たちの肝に銘じて、もっとやっぱり努力をしないといけないなと思うんですよね。もうそれ近代までで終わったということですかね。

Heideggerくらいまでで終わっちゃったという。

いや、終わったとは思っていません。我々が生きている時代にもあり得ると思うんですよ。

でもそれは大学という機関が全てではないから。ふーん。

大学は1つの枠組みであるに過ぎないので、学問っていうのは自由ですから、広がりを持っているので、博士論文というのは学問の内の1つの狭いframe、frameですよ。

修士課程とかも。学問そのものはもっと自由で広がりのあるものです。

だけど、社会の中でそれが生きている限りにおいては社会制度の中での評価とか、社会制度の中での仕組みとかに入り込んでいるので、それを上手く生きられないと、色んな生き方を自分で選択できないということになってしまいますよね。

話しは変わるんですけれども野球の二投流の「大谷」というのは凄いと思うんですわ。

常識ですよね。あれも球団が二投流を許したということがあって。

独創的ですね。普通はpitcherだったらpitcherだけだけれども、ねぇ、凄いなーと思って。Pitcherとしても優れているし、batterとしても優れている。それを認めた球団と言おうか、普通やったら、ねぇ、なんぼ希望をしていても無理だけれど。うん。

そして今、大リーグに行ってもあれだけの活躍を見せているということ自体はね。

うん、結果を出していますしね。

あの、それはあの15歳のかの少年もそうですか。

誰でしたっけ。藤井君。ああ藤井君か。

藤井君の将棋は、AIを上手く使って、こうAIとの勝負で鍛えられていくとは言っても、それを人と人との間で勝利を収めていく訳ですから、彼の中にideaというか、今までの常識で、読むだけでやったら破れますよね。うん。

だから、今までの常識で読むことの出来ない1手を、彼は常に考え出しているということだと思うんですよね。

だからそこのところの思考、ある種の柔軟な思考、広がりのある思考を持つことのできるような訓練というのか、彼はやっぱり1人でもやってきた。

突然出て来たんですかね。誰かが育てたんですかね。

もちろん、育てた、出て来た。育てたし、素質ですよね。

だから持って生まれたものがあって、それを磨く努力を。

あの、名人になる人は名人になるだけの素質はやっぱりあるのじゃないですか。

それを先生はちゃんと見抜かなきゃいけないし。うん。

それで見て、それを引き出していく時に、引き出し方を間違うと、その「独創性」とか「天才」を殺してしまうということも起こり得ますね。それで本当に独創的な人は、もう先生が間違っても自ら先生を一門を裏切って家出をするなり。ふふ。破門になるなりして。ふふふ。

自分の世界を切り開いていけると思うんですが。

でもそれはかなりの冒険で、岡潔がそうだったのですよ。

岡潔がもっと良い環境にいたら、もっと早くもっと理論をね、世界中にいち早く提示をすることができたかもしれないけれど、彼の大学の指導教授の京大の教授は本当に理解していなかったように描かれていた。こういうこともあり得る訳ですね。うん。

弟子の方が優秀で、先生がその弟子の力を全く過小評価してしまう。

だから優れた先生に出会うということは、とっても大事なことなんですよ。

まぁ、人生の幸せの1つですよね。

そういう時、先生はどうすれば良いのですか。

えっ、誰ですか。

たとえば、私が教員をやっていて、明らかに自分より優秀かもしれない学生っていうのがいるかもしれないですよね。もう沢山。

それは簡単なことですよ。褒めること。

褒めれば良いのかなぁ。それはそうですよ。

やっぱりこう、まず絶賛しなきゃいけませんね。うん。

あの考えて、なんとかじゃなくて、優れているものは優れているのですし、優れていると思ったことはやっぱり正直に伝える方が、私は大切だと思うんですよ。

同感ですね。やっぱり長所を褒めると、短所をけなすのではなくって。

私、前にこのclassで話したかどうか忘れましたけれど、私は先生が偉大だったと思っていますが、私の恩師の戸田義雄という先生は東大の宗教学を出て、國學院大學の教授になって、まぁ、途中で辞めて、定年の前に辞めて、非常勤講師をしながら、私がその非常勤講師である戸田義雄先生に付いたのですね。

私は大学の教授に修士論文を提出していないのですよ。

2人共、私の付いた先生は小野素郷先生も、教授を辞めて、かつて教授だったけれども非常勤講師。ですから私は現役の教授に学んでいないのですよ。

2人共に現役の教授だったけれども辞めて非常勤講師になった人ですから。

1人は定年になって、小野素郷先生は定年になって、もう一人は定年前に学生紛争とかがあって自分も感じるところがあって、教授を辞めて非常勤講師になった人です。

その戸田義雄先生が、何を思ったか、私にね「鎌田君、君のところには必ず三顧の礼を尽くして色んなところから人がやってきて、なんとかするよ。」みたいなことを言うんですよ。

かなり若い時代、30代の前半、私が大学院を修了して間もない頃で。

分からないじゃないですか。その私がどういう風になるかという風なこと。

でもその先生は過大評価じゃないのかと私は思いましたが、そういう風なことを言ってくれた訳ですね。2人でゆっくりといる時に。

ええっ、この先生は本当にそういうものを持っているんだろうか。

そういう風にこの、言う人も凄いな。

本当かどうか、そうなるかどうか分からないけれど、「三顧の礼」を尽くして誰かがね、「鎌田東二さん、ここに来てください。」と言われているかどうか分かりませんが、そういう風に言ってくれる人がいるということは本当に力強い励みにはなりましたね。

それで実際問題、私は30代から40代にかけて色んな大学にapplyしても、殆ど採用されませんでしたね。20くらいの大学には国立大学も含めて応募はしましたが採用はされませんでしたね。そうだったんですか。

京都大学も2回応募をして、1回目は落ちて、2回目に採用されたんですね。

なのでそういう人の苦しみというのか、評価されない、採択されないみたいな人の苦しみも分からないではないのですね。

でもその時に、採択されないでめげてしまうということももちろんありますし、採択されなかったり採択をしなかった大学は損をしたなぁと。鎌田東二みたいなものを採らないでこの大学は損したなぁという風に思います。ああ。

それで何でそう思ったかというと、やっぱりその自由であるべき学問の世界に、何かこう新しいものを切り開いていこうとする人間を採用できないような大学はやっぱり大学として弱いというのか。大学としての潜在力を十分に発揮することが出来ないと思ったんですね。私が学者として未完成であることは、今でもそうだと思っていますけれど、でも学問を志し、学問の世界を開いて行こうというそういう欲求は、まぁ、誰にも負けないとは言いませんが強く持ち続けている訳ですよ。どんな分野でも、そういう人が出て来たらそういう力は感じられる訳ですよ。違う分野でもこの人は凄いと思ったらやっぱり子どもであれ老人であれ凄いと思うと思うんですね。

そういった時にそう言えるかどうか、そう思えるかどうか、がやっぱり先生として勝負じゃないでしょうかね。

鎌田さんに似ている人を知っているんですがね。

誰ですか。観世榮夫さんなんです。観世榮夫先生ね。

寿夫さんの弟ですね。榮夫先生は能を劇として捉えて世阿弥みたいに他のgenreと色々とやって、映画にも出たり、coffeeのNescaféとか何かに出たり、それで観世流にはmethodがないと言って喜多流の芸養子になって、当時はtabooやったから能楽界からomitされて、それで脱退されて、それで色々なunder groundの劇をみんなで立ち上げて、劇団を作って劇団をやって、それで観世寿夫先生も榮夫先生の影響を受けて白石加代子さんと一緒にやったり。弟の影響ですか。へぇー。

榮夫先生の影響で寿夫先生が劇をやったりされたんです。

その後を継いでいるのが河村博重さんでしょう。ええ。

あの後ね、客員教授の後を。客員教授だったんですよ、観世榮夫先生。

晩年の榮夫先生と一緒に仕事をさせてもらって、もの凄く楽しかったですわ。

考え方が柔軟で。

初めて能を習う学生に『藤戸』という特別な曲をさせて、それでワキも狂言もシテ方は、普通は教えないのですわ。だけども、先生は教えはって。

あの、ちょっともったいないのでね、次回、観世榮夫さんのlectureをちょっと30分くらいしてもらえませんか。ああ、そうですか。観世榮夫さんの仕事。今言ってくれたことをもう少しまとめて、そしてあの、皆に観世榮夫という人がどんな仕事をして、どの辺が教育者としてもあるいは芸術家としてもその面白く、能の世界で異端児でありながら色んな演劇をgenreを超えて活躍して、また人材も育てた。

そういう人の営みを知ることによって、我々も生きる元気ももらえるしまたhintももらえると思う。

そういうことで、今日は切りが良いのでここで人数が少ないから終わりましょう。

   
**三、感想および考察と次回の予定**

① 5月の世阿弥研究会では『世阿弥能楽論集』「花鏡」から「浅深之事」(浅深のこと) (213頁初め～214頁1行目)までの講読が行われた。

② 「浅深之事」(浅深のこと)では能における謡・舞・所作やそのほかの万事にわたってしぐさの大小・大ようさ・細やかさについて具体的に考えながら確認をしてくることができた。

③ 前半ではそれを臨床心理学の河合隼雄先生や数学の岡潔先生の姿勢と辿られた人生の中に見る「浅深のこと」として考え、博士論文や修士論文の構想とも対応させながら考えることができたところが大変興味深かったと思われた。

④ また学問が学問であり芸術が芸術である由縁はoriginality(世阿弥の言うめずらしさや面白さ)にあるが、そのoriginalityを理解することが出来る人は少なく、博士論文ならば、学生は制度としての博士論文と同時に本物の博士論文の道を目指していくことが重要で、先生は論文指導を通じて上手く学生の持って生まれた素質を引き出し、学生の将来の可能性を伸ばしていくべきであるのだということを理解させて頂くことができた。

⑤ 次回の世阿弥研究会は6月26日(火)に18時より河村能舞台の楽屋で行われ、講読は『世阿弥能楽論集』「花鏡」の214頁6行目からの「幽玄之入レ境事」(幽玄の境に入ること)からである。

⑥ また次回は30分くらいの河村博重先生による「観世榮夫」先生のレクチャーも行われる予定である。

**参考文献・資料一覧**

① 小西甚一編訳『世阿弥能楽論集』「花鏡」たちばな出版, 2004, pp.188～238.

② 西野春雄,羽田昶編集委員『能・狂言事典』平凡社, 1999,

「薪能」「烏帽子折」「鞍馬天狗」「正尊」「船弁慶」

pp.264～265、pp.32～33, p.325、pp.53～54、pp.76～77、p.132、

「井筒」「野宮」「藤戸」pp.22～23、p.117、pp.129～130.

③ 小林保治,森田拾史郎編『能・狂言図典』小学館, 1999,

「薪能」「烏帽子折」「鞍馬天狗」「正尊」「船弁慶」

pp.38～40、p.17,102,185、p.17,102,185、p.17,134,205、p.17,134,165、

「井筒」「野宮」「藤戸」p.16,p.97,p.131,p151、p.16,p.100,p.132,p.222、p.17,pp.31～32,p.134,p.228.

④ 丸岡明著『能楽鑑賞事典』河出書房新社1961,

「薪能」「烏帽子折」「鞍馬天狗」「正尊」「船弁慶」

p.435、pp.121～123、pp171～173、pp.221～223、pp.344～346、

「井筒」「野宮」「藤戸」pp.100～101、pp.312～313、pp.339～341.

⑤ 小林責, 西哲生, 羽田昶著『能楽大事典』筑摩書房,2012.

「薪能」「烏帽子折」「鞍馬天狗」「正尊」「船弁慶」

pp.541～542、p.101、p.292、pp.461～462、pp.787～788、

「井筒」「野宮」「藤戸」pp.44～45、p.699、p.778.

「青木祥二郎」p.3、「青木道喜」p.3、「金剛流」pp.356～358、「式楽」p.414.

「大蔵流」pp.120～122、「和泉流」pp.35～38、「片山九郎右衛門」p.192、「片山博通」p.193.

「梅若実」pp.88～89、「梅若六郎」pp.89～90.「杉浦元三郎」p.487、「杉浦友雪」p.487.

「野村金剛」p.701「野村萬斎」pp.703～704、「野村万作」pp.704～705.「居グセ」p.30.

「河村隆司」pp.214～215、「観世寿夫」pp.226～227、「観世栄夫」p.227.

⑥ 西村彰朗文 ; 金剛能楽堂財団編『風姿 : 能を見に行こう : 金剛流能楽鑑賞入門』光村推古書院, 2004.

⑦ 矢追純一 (著)『カラスの死骸はなぜ見あたらないのか―あなたの常識がひっくり返る本』雄鶏社, 1993.

⑧ 「Tetsuya Kono's Philosophy and Ethics Office」

http://www2.rikkyo.ac.jp/web/tetsuyakono/index.html

閲覧日時、2018年5月26日(土).

⑨ イマヌエル・カント [著] ; 熊野純彦訳『純粋理性批判』作品社, 2012.

⑩ 渡邉浩一著『『純粋理性批判』の方法と原理 : 概念史によるカント解釈』(プリミエ・コレクション ; 14),京都大学学術出版会, 2012.

⑪ 船井幸雄(著)『百匹目の猿―「思い」が世界を変える』サンマーク出版, 1996.

⑫ 銕仙会 (編集)『観世寿夫―至花の風姿 (1979年)』平凡社, 1979.

⑬ 渡辺守章(編集)『幽玄―観世寿夫の世界―シンポジウム (1980年)』リブロポート, 1980.

⑭ 観世寿夫,観世銕之丞(ほか)著『花もよ18号』ぶんがく社, 2015.

⑮ 日本経済新聞「四世梅若実を襲名　能楽師の梅若玄祥さん」2018/2/17朝刊

https://www.nikkei.com/article/DGKKZO27043920W8A210C1CR8000/

閲覧日時、2018年5月27日(日).

⑯ 毎日新聞「梅若玄祥さん「四代梅若実」襲名へ」2017年5月10日

https://mainichi.jp/articles/20170510/k00/00e/040/321000c

閲覧日時、2018年5月27日(日).

⑰ 観世清和, 内田樹著『能はこんなに面白い』小学館, 2013.

⑱ 河合隼雄著『影の現象学』講談社, 2011.

⑲ 河合隼雄著『イメージの心理学』青土社,2011.

⑳ 皆藤章,松下妃歌編『京大心理臨床シリーズ10　心理療法における「私」との出会い―心理療法・表現療法の本質を問い直す―』創元社,2014.

公益財団法人上廣倫理財団編『わが師・先人を語る1』弘文堂, 2014.

河合俊雄「河合隼雄との3度の再会」, pp.221～258.

宮本武蔵著『五輪書』(いつか読んでみたかった日本の名著シリーズ5) 致知出版社, 2012.

「名著54 「五輪書」：100分 de 名著 – NHK」

https://www.nhk.or.jp/meicho/famousbook/54\_gorinnosyo/motto.html　閲覧日時、2018年5月28日(月).

「文化勲章受章者 世界的数学者「岡 潔」数学に対する熱意と偉業、情緒という日本人の心の大切さを未来に引き継ごう」https://www.furusato-tax.jp/gcf/66　閲覧日時、2018年5月28日(月).

高瀬正仁著『岡潔 : 数学の詩人』(岩波新書 ; 新赤版 1154),岩波書店, 2008.

岡潔著『春宵十話』(角川ソフィア文庫), KADOKAWA/角川学芸出版; 改版, 2014.

岡潔著『岡潔 数学を志す人に』 (STANDARD BOOKS)』平凡社,2015.

岡潔著,森田真生編集『数学する人生』新潮社, 2016.

「ノーベル賞日本人受賞者7人の偉業【湯川 秀樹】」

https://www.kahaku.go.jp/exhibitions/tour/nobel/yukawa/p1.html　閲覧日時、2018年5月29日(火).

湯川秀樹(著)『目に見えないもの』(講談社学術文庫),講談社,1976.

湯川秀樹(著),梅棹忠夫(著)『J-46　人間にとって科学とはなにか』(中公クラシックス)

中央公論新社,2012.

湯川秀樹(著)『湯川秀樹 詩と科学』(STANDARD BOOKS)平凡社,2017.

鎌田東二(著)『聖トポロジー－地霊の変容(意識と場所)』河出書房新社,1990.

佐藤春夫(著)『南方熊楠: 近代神仙譚』(河出文庫),河出書房新社,2017.

南方熊楠(著),中沢新一 (編集)『森の思想』(河出文庫), 出書房新社; 新装版, 2015.

唐澤太輔(著)『南方熊楠 - 日本人の可能性の極限』(中公新書), 中央公論新社, 2015.

乾由明編『キュビズムと抽象美術 世界美術大全集 西洋編28』小学館,1996.

ミヒャエル・エルラー(著)、三嶋 輝夫ほか(翻訳)『知の教科書　プラトン』(講談社選書メチエ), 講談社, 2015.

土橋茂樹 (著)『善く生きることの地平: プラトン・アリストテレス哲学論集』知泉書館, 2016.

三島憲一 (著)『ニーチェかく語りき』(岩波現代文庫),岩波書店, 2016.

ルドルフ・シュタイナー (著),高橋巖 (翻訳)『ニーチェ みずからの時代と闘う者』(岩波文庫), 岩波書店, 2016.

石澤秀二 (著)『世界演劇辞典』東京堂出版, 2015.

「観世寿夫」p.85.

「観世滎夫」p.85～86.

「アイデアは意外と明後日の方向からやってくる」「日経ビジネスAssocie2018年6月号」

日経BP社, 2018, pp.110～111.

「明治を創造したイノベーターたち」「WEDGE2018年6月」ウェッジ, 2018, pp.30～31.

「生田斗真×瑛太「少年A」を描いた映画「友罪」」「AERA18.6.4.No.25」朝日新聞出版,

p.9, pp.34-35.

「目キキ」＆「耳キキ」Key Person「野村万作」「リアリズムの世界を超えて」

「週刊朝日6.8増大号」, 朝日新聞出版, 2018, 42～43.

「もう一つの自分史第4回　解剖学者　養老孟司」「週刊朝日6.8増大号」,

朝日新聞出版, 2018, pp.54～55.

「湯川相互作用―数式に埋めこまれた湯川秀樹のアイデア」

「Newton」2018年7月号, ニュートンプレス, 2018, pp.36～37.

山中伸弥‐田原総一郎　山中伸弥教授に田原総一郎が迫る　iPS細胞作製から10年　再生医療が改めて問う国家と人生「百年の計」

「中央公論　2018. 6」中央公論新社, 2018 , pp.172～180.

景山洋平著『出来事と自己変容 : ハイデガー哲学の構造と生成における自己性の問題』

創文社, 2015.

日下部吉信著『ハイデガーと西洋形而上学 : 講演集』(シリーズ・ギリシア哲学講義 ; 別冊),晃洋書房, 2015.

鈴木大拙著 ; 橋本峰雄校注『日本的霊性』(中公クラシックス ; J36),中央公論新社, 2008.

戸田義雄編『日本カトリシズムと文学 : 井上洋治・遠藤周作・高橋たか子』大明堂, 1982.

「シベリウス ロマンティックな情景　op.101-5」

https://www.youtube.com/watch?v=2ZfIFz7VKPw　閲覧日時、2018年6月1日(金).

松原千振編『ジャン・シベリウス : 交響曲でたどる生涯』(叢書ビブリオムジカ = Bibliomúsica), アルテスパブリッシング, 2013.

「大川小訴訟判決　学校防災に重い責任」「月刊新聞ダイジェスト2018年6月号(第52巻第6号　通刊727号)」新聞ダイジェスト社, 2018, pp.52～55.

「熊本震災発生から2年」「月刊新聞ダイジェスト2018年6月号(第52巻第6号　通刊727号)」新聞ダイジェスト社, 2018, pp.48～51.

大内尉義, 秋山弘子,折茂肇編集『新老年学 第3版』東京大学出版会, 2010.

2章7「死生学」pp.1753～1772.

本村昌文「近代日本における「老年学」――寺澤嚴男の「老年学」構想をめぐって――」岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要第43号（2017.３）pp.21～40.

http://ousar.lib.okayama-u.ac.jp/files/public/5/ 54963/20170412105625307368/hss\_043\_021\_040.pdf

閲覧日時、2018年6月11日(月).

渡邉裕二「祝45周年　ユーミン松任谷由美の偉大な歩み」「サンデー毎日」2018年6月24日号

pp.138～141.

「大阪直下　M6.1　震度6弱　死者4人」毎日新聞2018年6月19日(火)1面.

「ひずみ集中要警戒」毎日新聞2018年6月19日(火)2面.

「社説　大都市直下型の恐ろしさ」毎日新聞2018年6月19日(火)5面.

「iPS心臓病治療を了承」「ES細胞作製　全国へ提供へ」

「月刊新聞ダイジェスト」2018　7月号　第52巻第7号通巻728号, p.154、p.155.

「死への想像力　失われた時代に　筒井康隆さんハイデガーを解く」

「朝日新聞」2018年6月21日(木), p.29.

筒井康隆著『誰にもわかるハイデガー : 文学部唯野教授・最終講義』河出書房新社, 2018.

M・ハイデガー著 ; 松尾啓吉訳『存在と時間』上(新装版)・下(新装版), 勁草書房, 2015.

「大阪北部地震　住宅被害、千数百棟か　近畿四府県　京都313棟確認」

「京都新聞2018年6月21日(木)」1面.

「大阪北部地震で大規模断水　水道耐震化　京滋も進まず」「京都新聞2018年6月21日(木)」3面.

「風評防止へ情報発信　大阪北部地震　関西観光　回復狙い」「京都新聞2018年6月21日(木)」5面.

「震災経験助言はめぐる　大阪へ　東北・東日本からの投稿　リツイートや共有は慎重に」

「朝日新聞」2018年6月21日(木)夕刊1面.

河合隼雄著『こころの読書教室』新潮文庫, 新潮社, 2014.

河合隼雄著『コンプレックスと人間』(河合隼雄著作集 / 河合隼雄著 ; 第2期 ; 第1巻), 岩波書店, 2001.

河合隼雄著『河合隼雄セレクション「出会い」の不思議』創元こころ文庫, 創元社, 2015.

河合隼雄[ほか]著『日本の精神性と宗教』創元社, 2006.

河合隼雄　基調講演　日本の精神性と宗教pp.11～54.

鎌田東二　指定討論Ⅰ　日本の伝承文化における宗教pp.58～73.

パネル・ディスカッションpp.105～152.

「大阪北部地震　塀の危険性3年前に把握」

「住宅被害京都407棟」「京都新聞2018年6月22日(金)」1面.

「学校安全確保に決意　首相交付税前倒しも表明」「京都新聞2018年6月22日(金)」5面.

「iPS心臓臨床研究遅れも　大阪北部地震被災　培養やり直し」「京都新聞2018年6月22日(金)」3面.

「大阪北部地震1週間　避難者なお529人」「京都新聞2018年6月25日(月)」1面.

「鉄道寸断車内に20万人　大阪北部地震1週間　路線復旧「各社で連携を」」

「京都新聞2018年6月25日(月)」3面.

「ともに生きる　京都新聞社会福祉事業団「子育て仲間を応援・事業助成」　震災の避難者支援　思春期の子に語る場を」「京都新聞2018年6月25日(月)」6面.

「真新しい社殿 舞で祝う　上京・少将井神社修復完了」「京都新聞2018年6月25日(月)」18面.

「発生時刻犠牲者を悼む　大阪北部地震1週間避難なお400人超」

「京都新聞夕刊2018年6月25日(月)」1面.

「手合わせ「安らかに」大阪北部地震1週間　長引く避難疲労の色濃く」

「京都新聞夕刊2018年6月25日(月)」11面.